原著
Japanese Journal on Support System for Developmental Disabilities

重度脳性麻痺者のスポーツ参加における問題点について

渡邉　貴裕　東京学芸大学附属養護学校

要　旨：本研究では、重度脳性麻痺者でありながら、現在積極的にスポーツ活動に取り組んでいる脳性麻痺者７名を取り上げ、事例を手がかりにスポーツ参加における問題点を明らかにすることを目的とした。その結果、以下のような知見が得られた。

①学齢期の体育の授業に満足感を得ている事例は、卒業後早い段階でスポーツ活動に取り組んでいた。

②スポーツに参加するにあたっては、物的・人的環境の整備、特に移動手段の確保について、多くの努力と工夫を要していた。

③スポーツを続けていく際に生じる身体の痛みである２次障害については、当事者の工夫や努力だけでは改善できず、そうした現実と向き合いながらスポーツに取り組んでいた。

これらをふまえ、スポーツが単に楽しみや喜び、達成感、生きがいを得ることを目的とするのではなく、体や健康といった面について周囲がどれだけ理解を示し支援していけるかが現状での課題であるといえる。

Key Words：　障害者スポーツ，脳性麻痺，事例

Ⅰ．はじめに

障害者スポーツの始まりは、リハビリテーションに求められるが、近年のパラリンピックを代表とする障害者スポーツの高まりの中で、リハビリテーションの延長という考え方から、日常生活の中で楽しむスポーツ、競技するスポーツとして認識されるようになった。今日では、障害がある人（以下障害者と記す）の間でも積極的にスポーツを行なう人達が増えてきており、各地で大小さまざまなスポーツイベントや競技会が開催されている。

ところがこれらのスポーツ活動に参加できるのは軽度の障害をもつ人達で、重度障害者が日常的にスポーツを楽しむまでには至っていない。特に重度脳性麻痺者はその複雑で多様な障害特性により、他の障害者に比べてスポーツに取り組みにくい状況にあり、参加人数も限られている。このことについて藤田ら[3]（1996）の調査では、第 31 回全国身体障害者スポーツ大会参加者の中で脳性麻痺による肢体不自由者の占める割合は全体の 12.5%（98 人）であり、他の障害に比べて少ないことを報告している。また陳（1996）は脳性麻痺者の中でも特に重度脳性麻痺者のスポーツ参加が少ないとし、その原因として重度の脳性麻痺者が参加できるスポーツ種目が国内大会においても、国際大会においても少ない[8]ことをあげている。一般に脳性麻痺者は他の障害者よりもスポーツ参加が困難である[4]といわれており、いくつかの問題が指摘されている。例えばひとつの動作を獲得するまでには長期的な取り組みが必要であること[5]、他者とのコミュニケーションが困難であること、健康面での安全管理が必要であること等である。

このような現状の中で、筆者は、重度脳性麻痺者を対象にスポーツ参加の意義について聞き取り調査を行った結果、以下のような知見を得ている[10]。

①重度脳性麻痺者の場合、身体的側面、精神的側面の効果よりも、特に社会的側面の効果に対して強く意味づけていること。

②こうした社会的側面の効果についてみたとき、スポーツに参加が外出のきっかけとなることで、交通機関の利用や友人との出会い等、対社会との関係に広がりをみせていること。

③さらに障害者が積極的にスポーツに取り組むことは、当事者を取り巻く社会の側にも変化をもたらし、そのことが社会参加しやすい状況を作っていること。

ところが重度脳性麻痺者の場合、スポーツ参

加それ自体の意義・効果もさることながら、様々な制約に対処していかなければならないという点も見逃すことができない。そうした制約を一つひとつ解決して初めてスポーツの喜びや楽しみを得ることができるからである。

これまでの障害者のスポーツに関する調査研究[2),3),6),7)]によれば、それらの研究対象は主に脊髄損傷や切断による中途障害者で、調査方法はもっぱら質問紙票調査によるものである。そのため中途障害者を除く他のスポーツ参加困難な障害者や、質問紙では聞き取れないような重い障害をもつ人達（例えば筆記ができない者等）の意見や考えは十分に明らかにされておらず、先行研究でも取り上げられていない。

そのためには、研究方法上の工夫とともに、事例を丹念に積み上げていく必要がある。

Ⅱ．目　的

本研究では重度脳性麻痺者を対象に取り上げ、①学齢期の体育授業及びスポーツを始めた動機、②スポーツ参加における問題点とその対応、について生活史をふまえて聞き取りを行い、重度障害者のスポーツ参加の問題点について事例を通して明らかにすることを目的とした。

Ⅲ．方　法

1. 対象

本研究では、筆者がスポーツ活動を通じて関わってきた者の中で下記の基準を満たし、かつ十分に信頼関係が図れた7名を抽出し対象者とした。

①身体障害者等級で１級、２級に該当する重度脳性麻痺者であること。
②継続したスポーツ経験があること。
③何らかのかたちでコミュニケーションが可能であること。

なお性別､年齢､職業等の概要については表.1の通りである。

2. 方法

自由面接（インタビュー）法による聞き取りを行った。脳性麻痺者は他の障害を重複する場合が多く、特に今回の対象者は言語障害を伴う場合があり、そのための特別な配慮が必要となる。言語障害のため聞き取りが十分できない場合には、文字盤の使用、Eメールやファックスなどを利用した。またコミュニケーションに時間がかかる者に対しては疲労を考え、数回に分けて聞き取りを実施した。

3. 内容

聞き取り調査は以下の観点から行った。

①生育歴及び現在の生活状況
②学齢期の体育の授業とスポーツをはじめた動機
③現在のスポーツ参加の状況
③スポーツ活動における問題点
④問題点に対する工夫

4. 手続き及び実施期間

今回の調査では対象者の内面に関わる問題もあり、人間的つながりを確保することが大変重要になってくる。ラポールを図るために、平成９年から対象者のスポーツ活動（練習、大会）にはボランティアとして参加し、またそれ以外のプライベートな面（食事、旅行、遊び）にも積極的に関わることで信頼関係を深めた。そして本調査の趣旨を十分理解してもらったうえで、平成 15 年８月下旬をめどに調査を実施した。

Ⅳ．結果及び考察

対象者７名それぞれの学齢期の体育授業及びスポーツを始めた動機とスポーツ参加における問題点及び工夫については表.2 に示した。

1．学齢期の体育の授業とスポーツをはじめた動機

表２にもあるように、今回の事例では学齢期の体育の授業について満足感を得ている者（４名.事例Ⅰ･A、Y･T、N･A、K･K）と不満足な者（３名.事例 T･G、T･A、U･I）がみられた。

学齢期の体育の授業について個々にみていくと、I･A は担任教師の存在について述べ、「(自分に）地面を蹴って進む力があることに気づいてくれ、足蹴りで進む車椅子を作って自分の力で動き回れるようにしてくれた」、また Y･T、N･A も「それぞれの（障害の）実態に応じてルールや条件を変えて取り組めるようにしてくれた」､また K･K は普通学校に在籍中「理解のある教師にめぐまれ、他の生徒と同じように授業に参加させてくれた」と報告している。

表 1. 対象者の概要（平成 15 年 9 月 30 日現在）

対象者	障害名	ADL の状況および備考	生育歴及びスポーツ活動
I・A 女 26 歳	脳性麻痺 （1 種 1 級） 四肢体幹機能障害。全身に極度の緊張と不随意運動がみられる。	移動は車椅子使用の際は全介助。電動車椅子での移動が可能。生活用の車椅子で足蹴りでの移動が可能。膝立ちができる。食事は部分介助（時間を要する）。排泄、更衣はほぼ全介助。言語障害のため発音が不明瞭だが、自分の言葉で意思を伝えようと努力する。	幼児期：障害児療育施設 学齢期：養護学校小学部～高等部 成人期：福祉作業所 足蹴り用レーサーで陸上競技に参加。ボッチャ競技、乗馬
T・G 女 35 歳	脳性麻痺 （1 種 1 級） 四肢機能障害。四肢に極度の不随意運動があり、静止させることが難しい。	移動は車椅子使用の際は全介助。電動車椅子での移動が可能。地下鉄や電車に一人で乗ることができる。食事、排泄、更衣はかなり時間がかかるが自立。言語障害のため発音が不明瞭。コミュニケーションの手段としてＥメールやファックスを使用する。	幼児期：障害児療育施設 学齢期：養護学校小学部～高等部 成人期：大学（聴講生６年）その後ピア･カウンセリングのボランティア 陸上競技（電動車椅子スラローム、ビーンバック投げ） ボッチャ競技
Y・T 男 26 歳	脳性麻痺 （1 種 1 級） 四肢機能障害。四肢に極度の緊張があり。膝立ちができる。	移動は車椅子使用の際は全介助。電動車椅子での移動が可能。地下鉄や電車に一人で乗ることができる。食事、排泄、更衣は一部介助が必要。コミュニケーションの際は言語障害があるため、口頭と文字盤を利用して意思を相手に伝える。またＥメールやファクスも使用する。	幼児期：普通幼稚園 学齢期：養護学校小学部～高等部 成人期：福祉作業所でボランティア 水泳、電動車椅子サッカー、陸上競技（電動車椅子スラローム、ビーンバック投げ、ペトラ）、ボッチャ競技
T・A 男 39 歳	脳性麻痺 （1 種 2 級） 四肢麻痺。クラッチを使用して、ゆっくり歩行ができる。	移動は車椅子を使用。短距離ならクラッチを使用した歩行も可能。上肢の可動域に制限がある。普通自動車免許（改造車）取得。ADL は完全に自立している。社交性があり、面倒見が良く、周囲への気配りができる。	幼児期：自宅 学齢期：養護学校小学部～中学部 高等学校は普通学校に在学 成人期：大学、一般就職の後、公務員試験を受験。現在大阪府職員 陸上競技（砲丸投げ、やり投げ） ボッチャ競技
N・A 女 30 歳	脳性麻痺 （1 種 2 級） 移動機能障害。下半身がほぼ完全に麻痺している。上肢の機能は良好。	移動は車椅子を使用。短距離ならクラッチを使用した歩行も可能。ADL は完全に自立している。無口でおとなしいが、礼儀正しく人との受け答えもしっかりしている。まじめな性格で毎日の練習もきっちりこなす。	幼児期：自宅 学齢期：養護学校小学部～高等部 成人期：一般就職の後、福祉作業所勤務 陸上競技（車椅子競技） アトランタパラリンピック女子 100m（T33 クラス）世界新記録で優勝
U・I 男 26 歳	脳性麻痺 （1 種 2 級） 体幹機能障害。アテトーゼ型による不随意運動がみられる。	小学校３年までは歩行も難しく、食事も刻み食であった。現在は自力歩行が可能で ADL も自立している。言語障害があり、発音も不明瞭であるが口頭でのやりとりができる。会話の際は顔面が引きつる。	幼児期：障害児療育施設 学齢期：小学校～中学校は普通学校、高等学校は養護学校に在学 成人期：一般就職の後、自営業の手伝い 陸上競技（短距離）
K・K 男 32 歳	脳性麻痺 （1 種 2 級） 四肢痙性麻痺。左足の踵を地面につけることができない。	歩行の際のバランスが悪い。歩行は問題ないが走るのは難しい。生後１歳の時、未熟児網膜症の手術を受けており、アキレス腱延長手術も 2 回受けている。ADL は自立。人あたりが良く、スポーツを通じた人間関係を大切にする。	幼児期：障害児療育施設 学齢期：小学校～高等学校まで普通学校に在学 成人期：一般就職の後、公務員試験受験、現在市職員として勤務 陸上競技（やり投げ、砲丸投げ、円盤投げ）、水泳競技、サッカー

一方普通学校に在学経験のある T･A、U･I は、「体育の授業には危ないという理由で参加させてもらえなかった」（U･I）、「得点係りか見学」（T･A）、「たまに参加しても周囲のいじめにあった」（U･I）、という経験をしていた。また、養護学校に在学したものは、事例 T･G を除いて体育の授業に参加しており総じて「（体育が）楽しみ、好き」といった感想を持っていた。

次にスポーツを始めた動機をみると、学齢期の体育経験が現在のスポーツ活動につながっている者は「足蹴り用車椅子で陸上競技に取り組むようになった」（I･A）、「養護学校の先輩が競技用車椅子に乗っているのを見て自分も乗ってみたいと思った」（N･A）の２名であった。Y･T は「機能訓練の一環として」、K･K も「体をリラックスさせたい、余暇を充実させたい」として、障害者スポーツセンターのプールを利用するようになった。U･I、T･A は障害のある人がスポーツで活躍する姿をテレビで見て「自分もやってみたいと思った」と報告している。また、スポーツを始めた動機について時系列で整理すると、養護学校高等部を卒業後早い段階でスポーツを始めている事例（I･A、Y･T、N･A、K･K）と、卒業後しばらく時間を経てからメディアがきっかけで始めた事例（T･G、T･A、U･I）にわかれた。

以上、学齢期の体育の授業とスポーツを始めた動機についてまとめると、学齢期の体育の授業に満足感を得ている者は養護学校卒業後すぐ、もしくは早い時期にスポーツを始めている（I･A、Y･T、N･A、K･K）。それに対して授業に不満を感じていた者（T･G、T･A、U･I）は、卒業後ある程度時間を経てからメディアを通してスポーツに憧れの念を抱いたり、そのほかの理由をきっかけとしてスポーツを始めていた。不満を感じていた事例 U･I はスポーツを「やりたいと思っていたけど、どこで何をやれるのかわからなく、学校の先生も知らなかったので（自分ではスポーツは）できないと思っていた」と述懐している。そして T･G は「体育やスポーツで楽しむことを体験したことがなかったので、やりたいという気持ち事態が起こらなかった」、T･A「自分の障害では仕方がない」とその頃の心境を語っている。

重度脳性麻痺者の場合、周囲の「障害」に対する消極的な理解・認識に加え、「（障害が重度であるため）スポーツはできないもの」と思わされているという、二重の意味で「できない」状況を生み出しやすいことは事例からも推察される。そしてこのことが、物的環境の制限に加え現状における重度脳性麻痺者のスポーツ参加の機会や可能性を著しく制限していること、また彼らにとってのスポーツ参加の意味を見えにくくさせている一因であるように思われる。

一方、今回のように体育の授業に満足感を得ている者が、卒業後早い段階でスポーツを始めているという結果にもあるように、学齢期の体育に楽しみや満足感を得ることは、今後生涯スポーツへとつながっていくためにも大変重要な意味をもつ。そのためには障害をもつ子供に対して適切な体育・スポーツ指導ができる教師・指導者の必要性[9)、11)]が示唆される。

2. スポーツ参加における問題点について

スポーツ参加における問題点は、それぞれのおかれている環境や生育暦との関係、本人の受け止め方の違いから多様であった。そこで、ここではそれらの事情をふまえ、個別に取り上げてみた。

I･A は、活動場所までの移動について「練習場所や大会会場にはすべて母の車で行く」ことから、送迎をしてくれるボランティアを探すことに苦労していることをあげた。また I･A の場合は、ボッチャを行う際にも介助者が必要となることから、そうしたボランティアを確保することが常に課題となっているようであった。Y･T は活動場所までの移動という点では共通であるが、別の問題点をあげている。Y･T の場合、活動場所までの移動は電動車椅子を利用し一人で行っている。ところが、途中（例えば駅の階段等）他者に介助を要する箇所で、人を呼び止めることができない、呼び出せたとしても発音が不明慮なため相手にうまく伝えることができないといった問題がたびたび起こった。この点については T･G も同様の経験をしており、駅の階段を利用する際に人の手を介さなければならないことを問題として報告していた。T･A、K･K はそれぞれ活動場所として障害者スポーツセンターを利用している。「職場から遠い」こともあり「できればもっと身近に利用できる施設があればいい」とらえていたが、「指導者や仲間がいること」を理由に現在の施設を利用している。また、K･K はまだ競技人口の少ない脳性麻痺者のサッカーに取り組んでいることから仲間を集めることに苦労していた。N･A も自宅から活動場所までの移動に車で一時間

かけているが、家族の協力もありそうした条件をクリアしている。N･A については自分が取り組んでいる種目（車椅子の陸上競技）で「一緒に競い合える仲間が欲しい」ことを報告していた。U･I は障害者スポーツセンターが地域にないため、一般の陸上競技場等を利用しなければならない。ところが「(障害があることを理由に）使用許可がなかなかもらえなかった」ことを報告している。また N･A と同様に「一緒に走る仲間がいない」ことや「専門的にアドバイスをくれる指導者がいない」ことを問題としていた。

また、今回特徴的な意見として、頚椎症による首や背中の痛みを訴える者（I･A、Y･T、T･G、T･A、U･I、K･K）や下半身に痙攣を生じる者（N･A）があげられた。脳性麻痺者はスポーツによる強い緊張状態を長時間保持することで、二次障害に悩まされる場合がある。「スポーツをした日の夜は、眠りについても自分の体の緊張で目を覚ますことがある」（I･A、T･G、U･I)。事例 T･G はボッチャ競技を行う際、アテトーゼによる体の揺れを止めることで極度の疲労を感じている。

以上、スポーツ活動における問題点をまとめてみると、これらは大きく、①物的環境（施設・設備、移動手段等)、②人的環境（指導者、ボランティア等)、③その他（情報保障、経済的側面、健康管理、二次障害）に分類することができた。

これらの問題点について、それぞれの事例の障害区分でみていくと、１級に該当する３名（I･A、T･G、Y･T）は、活動場所までの移動手段の確保に重きをおいている。それ以外の事例は指導者や仲間、ボランティア等の人的環境をあげた。また、さらにこれらの問題点を時系列で整理してみると、スポーツ開始時とスポーツ継続期ではその問題点の内容に違いが見られ、スポーツ開始時では物的・人的環境についての内容が多く、スポーツ継続期には二次障害について取り上げる者が多かった。彼らがスポーツ参加していくためには、活動場所や指導者、仲間の確保といった、従来指摘されてきた問題点に加え、特に活動場所までの移動過程を克服することが重要となる。このことは単に自宅から活動場所までの物理的な移動の問題だけではなく、移動過程に生ずる様々な制約に対処していくことを意味する[1)、12)、13)]。こうした問題を一つひとつ解決して初めて、スポーツ参加の意義[9)]を見出すことができる。その意味では重度障害者のスポーツ参加を考えていく際には、移動といった問題を十分考慮したうえで物的・人的なサポートをしていく必要があるといえる。

3. スポーツ参加における問題点への対応

ここでは、スポーツ開始時における問題点である物的・人的環境についての対応、スポーツ継続期における問題点である二次障害についての対応に分けてみていく。

スポーツ開始時の問題点として物的・人的環境、特に活動場所までの移動手段の確保についてあげた３名（I･A、T･G、Y･T）についてみていく。I･A は活動場所まではすべて母親の車で移動していたが、「母の都合がつかないときは（スポーツの）練習に通えない」ということを「しょうがない」ととらえていたが、「母がいなくても通える方法はないか」と思うようになってきた。I･A は身辺処理について他者の支援を必要とするため、一人で公共機関を利用することは難しい。そこで大学生に活動場所までの移動及び着替えや排泄等の介助のボランティアを依頼することにした。練習や大会等の日程をなるべく早く伝え確認をとり、ボランティアが確保できない日だけ母に送迎を頼った。自分がスポーツをするために「ボランティアはとても大事」と本人もとらえている。「誕生日にはお手紙を渡す」「旅行に行ったときはお土産を渡す」等の心配りをするようにもなった。Y･T 、T･G の場合は、これまで外出の際に保護者やボランティアを同伴していたが、スポーツ活動に参加するために、現在は電車やバスの乗り方を覚え、一人で練習に通っている。特に T･G、Y･T の 2 名は電動車椅子を使用しており、自分一人で乗り降りできる駅も限られている。そのため Y･T は東京都内の地下鉄及び JR の駅で、自分一人で乗り継ぎができるエレベーター又は車椅子用エスカレーターのついた駅を探すことからはじめた。「なるべく一人で行けるようにしたい」が移動の節目に他者の協力が必要な箇所がある。例えば自宅の西川口駅では、通行人に階段上にいる駅員を呼んできてもらうように依頼しなければならない。しかし通行人をすぐに呼び止められないことが多く、呼び止めることができてもうまく伝えられないこともあった。そこで「駅員を呼んでください」、「～までの切符をください」と書いた会話カードを作り、自分の言葉の代わりにカードを提示して他者の協力を求めている。同様に T･G も

スポーツ活動に参加するために、大阪の地下鉄で介助者なしでも乗り継ぎができる駅や、一人でも使えるトイレを調べ、電動車椅子に乗って一人で外出している。

今回の事例はスポーツ活動を続けているうちに、それぞれの所属する集団の中心としてリーダーシップを発揮するようになった者が多い。特に Y･T は電動車椅子サッカーチームのキャプテン、T･A は日本ボッチャ協会会長、K･K は横浜サッカークラブの代表として役割を担っているが、それぞれがメンバーやボランティア、指導者の確保に時間と労力をかけていることを報告している。障害者スポーツセンターや地域の雑誌、広報で活動を紹介し、同時にボランティア募集も行った。K･K はインターネットのホームページを作りメンバーを集めていた。N･A は脳性麻痺者の車椅子 100、200m 競技、U･I は陸上（短距離）と、それぞれ競技人口が少ない種目に取り組んでいる。N･A は、「パラリンピックで世界の選手と競い合うことを目標」に、練習では「記録を伸ばすことだけに集中する」と報告している。また、K･K も「自分の活動が認められれば（仲間も）増える」ことを信じて練習に取り組んでいるようであった。

次にスポーツ継続期における問題点である二次障害についてみていく。二次障害については、それぞれが「背中や首の痛み」（I･A、Y･T、T･A）、「過度の緊張による極度の疲労感」（T･G）、「足関節の拘縮」（K･K）、「首や背中の痛みと睡眠中の痙攣」（U･I）、「競技用車椅子の姿勢保持による大腿部の痛みと痙攣」（N･A）とそれぞれが報告した。それに対して、「運動前後のストレッチを長めに行う」、「水泳でのリラクゼーション」、「マッサージや理学療法を受ける」、「湿布薬、アイシング、スプレー等の緩痛剤の塗布」等の工夫を行っているが、７名全員が「（痛みは）よくはならない」、「年々痛みがひどくなっている」ことを報告している。

こうした二次障害に関して当事者は「スポーツの楽しさと引き換え」（I･A、T･G、A･T、U･I ）、「けがや故障は頑張っていることの証拠」（N･A）、「しょうがないと思っている」（K･K）ととらえているが、同時に「スポーツができなくなるのでは」といった不安だけではなく、「普段の生活が送れなくなるのではないか」、「将来（自分の体は）どうなるのだろう」といった生活全般ひいては将来に関わる問題と感じているようであった。

以上、スポーツ開始時、継続期における問題点とその対応についてまとめると、物的・人的環境については本人の努力と工夫によって課題を克服し活動に参加している。ところが、スポーツ継続期における問題点として事例の全員が述べた二次障害については、現在のところ当事者の工夫と努力だけでは改善できておらず、むしろ不安を抱えながらスポーツに取り組んでいるという状況であった[14]。これらの問題について当事者が「スポーツが続けられなくなるのではないか」ということだけでなく、生活全般ひいては将来に関わる不安としてとらえている以上、この事実を本人だけのものとしていくことは大きな問題である。その意味では、単にスポーツが楽しみや喜び、達成感、生きがいを得ることを目的としたものだけではなく、体や健康といった面について周囲がどれだけ理解を示し支援していけるかが現状での課題であるといえる。

Ⅴ．まとめ

これまで重度脳性麻痺者のスポーツ参加が困難な状況にあることが指摘されてきた。ところが今回生活史に踏み込んで聞き取りを実施した結果、従来指摘されてきた問題点に加え以下の点が明らかになった。ひとつは、周囲の「障害」に対する消極的な理解・認識により、本人が「スポーツはできないもの」と思わされている点である。そのことがスポーツ参加の機会と可能性を著しく制限し、彼らにスポーツ参加の意味それ自体を見えにくくさせている。その意味では、学齢期における体育の授業は生涯スポーツを考えていくうえでも重要である。

また、スポーツに参加するための物的・人的環境の整備、とりわけ活動場所までの移動手段の確保に、多くの努力と工夫を要している点である。このことは単に自宅から活動場所までの物理的な移動の問題のみならず、移動過程に生じる様々な制約までを含め考えていく必要がある。

さらに全員の事例が報告したスポーツ活動による身体の痛み、いわゆる二次障害という現実と向き合いながらスポーツに取り組んでいるという点である。これらの問題について当事者が「スポーツが続けられなくなるのではないか」ということだけでなく、生活全般ひいては将来に関わる不安としてとらえている以上、こ

表２．学齢期の体育の授業、スポーツ参加における問題点と工夫（平成 15 年９月 30 日現在）

対象者	学齢期の体育及び スポーツを始めた動機	スポーツ開始時、スポーツ継続期における 問題点と対応
Ｉ・Ａ 女 26 歳 脳性麻痺 （1 種 1 級）	【学齢期】障害が重度のため訓練が主だったが、先生の援助により球技などにも取り組む。足蹴り用車椅子に乗ってからは陸上競技にも参加。 【動機】Ｉさんを担当した体育教師が、Ｉさんに地面を足で蹴って進む能力があるのに気づき、足蹴り用の車椅子を作ったのがきっかけで、陸上競技に取り組み始める。	【開始時】①物的環境（活動場所までの移動）、②人的環境（介助者の確保、指導者） 「移動や（ボッチャ）の介助者を探すことに一番苦労している。」 【継続期】背中の痛みや、下半身の痙攣。運動前後に指導者やボランティアにお願いして身体のストレッチに取り組む。 陸上競技では、「首や肩、背中の痛みが大変」で「練習した次の日は、作業所での仕事にも影響がある」。身体の痛みは「だんだんひどくなってきている」
Ｔ・Ｇ 女 35 歳 脳性麻痺 （1 種 1 級）	【学齢期】体育は訓練の時間としてリハビリを行なう。体育教師に障害児の体育の知識がなく、授業にバリエーションがなくつまらなかった。「体育やスポーツで楽しむことを知らずに育った」。 【動機】「友達をつくりたくて」障害者スポーツセンターで陸上クラブにはいる。クラブの先輩にボッチャ競技を紹介され取り組む。	【開始時】①物的環境（活動場所までの移動）、②人的環境（介助者の確保、指導者）、③その他（情報、組織、活動資金） 「外出する際に依頼するガイドヘルパーや、ボッチャの補助具を持ってもらう介助者などの手を借りなければならない」、「自分のやりたいときではなく介助者が確保できたときだけしかスポーツができない。」 【継続期】過度の緊張による極度の疲労感、全身の痛み。活動前後のストレッチ、湿布薬等の緩痛剤の塗布。 「身体の痛みは年々強くなってきている」こともあり、大会ではあえて電動車椅子を使って移動する。
Ｙ・Ｔ 男 26 歳 脳性麻痺 （1 種 1 級）	【学齢期】　生徒の実態に応じてルールや条件を変えて、球技（ゴロバレーやハンドサッカーなど）に取り組む。体育の授業は楽しみだった。 【動機】生後 3 歳から訓練の一環で水泳を始めた。水泳を行なっていた障害者スポーツセンターで電動車椅子サッカーやボッチャ競技にも取り組むようになる。	【開始時】①物的環境（活動場所までの移動）、②人的環境（ボランティアの確保、指導者）、③その他（組織、活動資金、法的整備） 「駅では駅員を呼んで欲しいことを周りの人に伝えなくてはならない」のでカード等を作成した。「仲間がいないと楽しめない」ので（自分たちの活動を紹介する）チラシを配布、ホームページでの呼びかけをした。 【継続期】背中の痛み、手足の筋緊張。活動前のストレッチ、水泳によるリラクゼーション、痛みを感じる前に運動をやめる等 「体の痛みはスポーツの楽しさと引き換え、しょうがいない」、「これから自分の体がどうなっていくのか不安」。
Ｔ・Ａ 男 39 歳 脳性麻痺 （1 種 2 級） 普通学校経験有り	【学齢期】 養護学校在学中、体育は訓練の時間でリハビリを行なう。高等学校では見学か別メニュー。「自分の体ではしょうがない」と思っていた。 【動機】テレビで両足切断の人が泳ぐのを見て感激し、「スポーツに目覚めた」。障害者のスポーツセンターで泳ぐ傍ら、陸上競技（投擲種目）にも取り組む。	【開始時】①物的環境（活動場所）、②人的環境（ボランティア、指導者）、③その他（活動資金、情報） 「活動場所が遠く、もっと身近に利用できる施設が欲しい」、「陸上競技（投擲種目）では、もっと競い合える仲間が欲しい」。 【継続期】首や背中の痛みが年々強くなってきている。運動前後や仕事の合間をみて意識的にストレッチを行なう。 「移動の際は、あえて車椅子を利用」することで、体への負担を減らしている。将来へは不安を感じる。
Ｎ・Ａ 女 30 歳 脳性麻痺 （1 種 2 級）	【学齢期】生徒の実態に応じてルールを変え、球技などにも取り組む。障害の重い生徒も一緒に取り組む。体育の時間は好きだった。 【動機】養護学校高等部２年時、先輩が競技用の車椅子（レーサー）に乗っているのを見て、「自分も乗ってみたい」と思ったのがきっかけで陸上競技に取り組み始める。	【開始時】 ①物的環境（活動場所）、②人的環境（競い合える仲間）、③その他（練習方法） 陸上競技（車椅子）では、「競い合える仲間が欲しいが（競技人口が少ないので）難しい」、（フォームをチェックしてくれる）指導者を頼りに、２時間かけて一ヶ月に２回練習に通う。 【継続期】競技用車椅子の姿勢保持による大腿部の痙攣。肘の痛み。運動前後のストレッチを意識的に行なう。 「体の痛みはしょうがない」「頑張っていることの証拠」
Ｕ・Ｉ 男 26 歳 脳性麻痺 （1 種 2 級） 普通学校経験有り	【学齢期】普通学校在学中、体育は常に見学。たまに参加しても障害のためにできないことがあり、いじめにあった。成績は低い評価を受けた。 【動機】アトランタパラリンピックの車椅子競技で日本人選手が活躍する姿をテレビで偶然見て、「自分もあの舞台（パラリンピック）で活躍したい」と思い、陸上競技を始める。	【開始時】①物的環境（活動場所）、②人的環境（指導者、仲間、ボランティア）、③その他（活動資金、情報） 「障害があることを理由に、練習場所を利用させてもらえなかった」「自分が陸上競技を頑張り、大会で成績を残すことで許可がもらえた」 【継続期】首や背中の痛みと睡眠中の痙攣。運動前後のストレッチを意識的に行なう。マッサージを受けに行く。 「体の痛みは年々ひどくなってきている。」「練習した日は睡眠中も自分の体の痙攣で目を覚ますことがある」
Ｋ・Ｋ 男 32 歳 脳性麻痺 （1 種 2 級） 普通学校経験有り	【学齢期】理解のある体育教師に恵まれ、他の生徒と同じように（必要に応じてルールを変えて）取り組む。体育の時間が楽しみだった。 【動機】高等学校卒業後、余暇の充実や機能訓練を目的として、障害者スポーツセンターでさまざまなスポーツに取り組む。1998 年、横浜に脳性麻痺者のサッカーチームを設立。	【開始時】①物的環境（活動場所）、②人的環境（指導者、仲間の確保） 「一緒に活動する仲間を集めることが大変」「友だちのつてや、ホームページで呼びかけている」 【継続期】足関節の拘縮。運動前後のストレッチ。リラクゼーションを兼ねての水泳に取り組む。 「体の痛みが強くなってきていて、将来はどうなるのか不安を感じる」、「体の痛みはしょうがないと思っている」。

の事実を本人だけのものとしていくことは大きな問題であり、その意味では体や健康といった面に着目し考えていく必要がある。

文　献

1）石川敦士・中村勝二（2001）：重度脳性麻痺者の移動行動に関する一研究～スポーツ参加に伴う移動過程を手がかりとして～. 順天堂大学スポーツ健康科学研究，５，16－26

2）藤田紀昭（1998）：ディサビリティ・スポーツ～僕達の挑戦～．東林出版社，p 73.

3）藤田紀昭・高橋豪仁・黒須充（1996）：身体に障害がある人のスポーツへの社会化に関する研究．日本福祉大学研究紀要，96，65－94.

4）大久保春美（1996）：重度障害者のスポーツ・レクリエーション．総合リハビリテーション，24（12），1195－1197.

5）Rudi,J.G.初山泰弘訳（1998）：脳性麻痺とスポーツ．臨床スポーツ医学，15（2），115－158

6）高橋豪仁・佐藤充宏（1995）：身体障害者のスポーツに関する調査研究. 徳島文理大学研究紀要，49，47-62.

7）高橋寛（1995）：障害者の日常生活，社会生活におけるスポーツ．体力科学，2（2），81-83.

8）陳鋼（1996）：日本における重度脳性麻痺者の競技スポーツの現状と課題. 筑波大学大学院体育研究科修士論文,

9）中川一彦（1990）：特殊教育諸学校の体育教員の現状に関する一考察．スポーツ教育学研究，10（１），55-64

10）渡邉貴裕・中村勝二（2000）：重度脳性麻痺者のスポーツ参加の意義について. 順天堂大学スポーツ健康科学研究，４，118-128.

11）渡邉貴裕・石川敦士・中村勝二（1999）：障害がある人のスポーツに関する研究－その①. 日本特殊教育学会第 37 回大会論文集

12）渡邉貴裕・石川敦士・中村勝二（2001）：障害がある人のスポーツに関する研究－その②. 日本特殊教育学会第 39 回大会論文集

13）渡邉貴裕・石川敦士・中村勝二（2002）：障害がある人のスポーツに関する研究－その③. 日本特殊教育学会第 40 回大会論文集

14）渡邉貴裕・石川敦士・中村勝二（2004）：障害がある人のスポーツに関する研究－その④. 日本特殊教育学会第 42 回大会論文集